



Humanity & Nature

Newsletter

No.85

October 2021

地球研ニュース

今号の特集

P2 特集1

所長インタビュー

日本からの
地球環境学
「人間を知る」学問に
山極壽一＋阿部健一

P7 特集2

着任インタビュー

「秘境・地球研」の
魅力を届ける
岡田小枝子＋近藤康久

P11 特集3

座談会

超学際が
うまれるところ
田村典江

連載 P15 所員紹介…… 君嶋里美
P16 表紙は語る…… 吉田丈人



日本からの地球環境学 「人間を知る」学問に

話し手● **山極壽一**（所長）

聞き手● **阿部健一**（教授）

初代所長に日高敏隆さんを迎えて2001年に発足した地球研。立本成文さん、安成哲三さんにつづいて第四代所長に就任したのが、ゴリラの研究で知られる山極壽一さん。アフリカ各地で野生のゴリラの群れに入り、ゴリラになりきって行動をとともにしながら、その生態と彼らをとる環境を観察してきた。「サルを知ること人間を知ること」というサル学の精神を受け継ぐ山極所長は、地球環境学研究をどう導くのか。2021年4月に開催された地球研創立20周年記念シンポジウムなどでその一端を共有したが、その根幹にある山極所長の個人の研究歴とそこから生まれた考えをあらためて聞いておきたい。思わぬ長くなってしまったインタビューの第1回分である

山極●私が学部生の時代に、のちに私の恩師となる伊谷純一郎（京都大学アフリカ地域研究センター初代所長）さんの書かれた『ゴリラとピグミーの森』（岩波書店）を読んで、「こういう世界があるのか!」と、サル学の意義をはじめて知りました。人間を知るには、人間を見ているだけではダメだ。ちがう生きものから進化して人間になったのであれば、人間に近いサルや類人猿から過去の人間の姿を類推しないといけないということです。

日本の霊長類学の創始者である今西錦司（故人・京都大学名誉教授）さんも、第二次大戦中に遠征先の内蒙古でモウコノウマを見て、「動物にも社会がある」と気づき、動物社会学をはじめられました。戦後になって、伊谷さんたちと宮崎県都井岬でニホンザルの群れを見て、「これはおもしろい」と、1948年12月3日にサルを研究しようと宣言された。これが日本の霊長類学の出発点ですよ。

生物を理解するには、 生活する場所ごと知るべし

山極●当時の欧米の動物学者は、動物に社会があることも文化があることも認めておらず、ことばを使いこなす人間だけが社

会と文化を構築するものと思い込んでいた。これを覆したのが、日本の霊長類学の功績の一つです。今西さんは、人間以外の動物には人間の文化につながる「前文化」があるにちがいないと見なし、動物にも社会があることを証明しようとしたのです。

もう一つの意義は、日本発の学問であること。今西さんはサルの研究をはじめるまえの1941年に『生物の世界』（講談社）という本を書かれた。これは西田幾多郎の哲学の影響を強く受けていて、欧米の自然観とは異なるものでした。というのも、欧米は主体と客体とをはっきりと分けて、人間と環境とは明確な距離を置きますね。しかも、人間は自然を客観的に分析し、技術によって人間に都合のよいように環境を改良した。それが近代科学の使命となったのです。

一方の東洋は、人間は自然の一部であり、自然と人間とは分けられないと考える。生物も主体性をもって自然と付き合っており、自然のもとで人間はどうふるまい、ほかの生物とどう共生すべきかを考えなくてははいけないとする。

今西さんは、『生物の世界』を書くまえに、京都の加茂川の上流で4種のヒラタカゲロ

ウの「棲み分け」の現象を発見した。生物は互いに環境を使い分けて共存しているということです。それぞれが種としてのアイデンティティをもって空間を使い分け、多様なかたちで棲み分けている。

もう一つの発見は、種間のコミュニケーションをとおして互いに共存していること。今西さんは、「この世界は、生物も非生物も、もとは同じものから出発し、分岐し、発展した」と指摘しています。

阿部●無生物も含めてのコミュニケーションであり、相互依存。ダーウィン主義者には絶対受け入れられないでしょうね。

山極●今西さんが生涯にわたって反論したのは、競争原理をもとにするダーウィンの進化論。ダーウィンは、たくさんの子孫を残せる個体が生き残り、その個体の性質が子孫に受け継がれることを進化と考えた。個体を中心とした進化のメカニズムです。

今西さんはこれに対して、「大進化」という種や複数の種を含んだ進化現象を考えた。生物は、同種や異種の仲間と共存するために主体性をもって環境に働きかけられている。だから、生物とその生物が暮らす場所とは切り離すことのできない一体的なものであるという考え方です。これが



屋久島のニホンザル

今西さんのフィールドワークの根源にある。生物が生き生きと暮らしている場所で、その環境や生物の行動、暮らしなどすべてを理解しないと、その生物のことはわからないという態度です。これを後に「自然学」と今西さんは呼んだ。

サルを知ることは人間を知ること

阿部●「自然学」は日本人には理解しやすい。子どものころからの生きものとの接し方が影響しているのかな。ぼくは『ファール昆虫記』（集英社）がバイブルだった。

山極●もう一つは、『シートン動物記』（白揚社）。この二つは聖書みたいなものだね。ところが、欧米の動物学者はいまでは『シートン動物記』も知らない。

阿部●『ファール昆虫記』も、多くの人に読まれているのは日本だけ。フランス人にすら知らない人が多い。

山極●シートンは、動物学者とはみなされていないからです。動物ものの文学は、物語であって科学ではないと軽んじられた。ところが、日本は動物と人間とを区別しないから、オオカミやキツネが人間のことばを話すという擬人的な表現を受け入れられる。今西さんも、サルやウマ一頭一頭に名前をつけて、彼らの行動を個体名とあわせて記述しましたからね。

阿部●動物を個体識別しようとは、欧米人は思いつかない。

山極●人間の世界で個人的な関係を結ぶウマやイヌなどのペット動物、愛玩動物には名前をつけますが、野生動物に名前をつけるなどはありません。シートンでさえ、英雄的な個体にしか名前をつけていないのですからね。

今西さんは、一見目立たないメスや若いオスたちをも個体識別しようと、すべての個体に名前をつけるよう提案した。当時の学生や若い研究者は、「おまえたちは一頭のサルになれ。サルと仲よくなるには、すべてのサルに名前をつける必要がある」と教えられました。



地球研第四代所長（2021年、地球研敷地内にて）

伊谷さんは、『高崎山のサル』（講談社学術文庫）で、サルの心理を事細かに描写しています。順位が低いオスは、順位の高いサルを前にして、おいしそうな餌を獲得するには状況をどう判断し、どう行動したのかを描いています。

阿部●日本の動物観が活かされている。

山極●この研究に欧米の研究者からは、「人間を描写するように動物を記述するとはなにごとか」と非難置々でした。しかし、イギリスの霊長類学者ジェーン・グドールも、チンパンジー個体すべてに名前をつけてその心を覗くかたちで『森の隣人』（平凡社）を書いて、やはりイギリスの学界から罵々たる非難を受けた。アメリカの動物学者ジョージ・シャラーは、ゴリラに名前をつけて心理を読みながら『ゴリラの季節』（ハヤカワ文庫）を書いています。

阿部●欧米にも、個体に名前をつけて記述した研究者はいたのですね。

山極●科学としては認められないから、あ

くまでもエッセーとして書いていますね。日本の研究者は、はじめから確信犯です。霊長類学は観察者が動物になりきることができる。サルの群れに入ってサルと同じように行動しながら、なぜその行動をとったのかを逐一自分の体験から理解するのがサル学。ほかの動物ではできない。人間は、イルカのように海を泳げないし、アナグマのように穴の中で暮らせない。けれどサルの研究なら、木から木に飛び移ることはできなくとも、彼らとともに行動できるのです。

そのようにサルとともに行動することで、人間の身体に眠っている過去の記憶や痕跡、人間がサルと共通の祖先をもっているという実感を引き出すことができるのです。

こういった方法論で修士時代の私はニホンザルを研究していましたが、やはり人間に近いゴリラを研究したいと思い、1978年にアフリカに行くことにしました。

（次ページにつづく）

日本からの地球環境学 「人間を知る」学問に

阿部●日本の動物社会学、霊長類学は、あくまで「人間を知る」ためという「人間学」の一部だということか。

山極●なぜ日本の霊長類学者はサルを研究することで人間を知ろうとしたのか。今西さんの霊長類研究グループにも参加していた河合雅雄（故人・京都大学名誉教授）さんはその問いに、「われわれは、敗戦の記憶に大きく影響されていた。なぜ人間はこんな悲惨なことをしてしまったのか。その原因はどこにあるのか。それは進化の歴史を掘り下げて、人間の本性を深く考えなければわからないと感じたからだ」と。

サルと人間には 生物学的な連続性がある

山極●今西さんはダーウィンに対して、「主体性の進化論」という考えで挑戦した。伊谷さんは、「人間平等起源論」（『伊谷純一郎著作集第3巻』平凡社）という論理でジャン=ジャック・ルソーの『人間不平等起源論』（岩波文庫）に挑戦した。両者とも、欧米発の自然観、人間観に日本の霊長類学の立場から異議を唱えた。

伊谷さんは、サルの社会にはすでに「先

験的不平等」があると主張した。たとえば、ニホンザルの社会には優劣に基づく順位序列がありますね。これはケンカを防ぐための秩序。強いサルに睨まれた弱いサルは自分の欲求を抑制して、食物や交尾相手をめぐる競争を避ける。そうすることで群れの秩序を守る。しかし、人類はこの「先験的不平等」をあえて駆動させない「条件的平等」の規矩、すなわち遊びや食物分配といった社会行為を発達させた。その萌芽はゴリラやチンパンジーなどの類人猿に見られます。

阿部●日本の「差等」入会という言葉思い出しました。「差があつて等しい」という考え方。森でのキノコ採りを解禁する口開けの日は、住民がいつせいに山に入るのではなく、「子どもが立派に成人したあなたの家は、今年は遠慮しておきなさい」、「あなたの家は親父さんが倒れてたいへんだ。先に採りに行きなさい」と差をつけるのです。それこそが平等だという考え方。



阿部健一

コモンズの研究でノーベル経済学賞を受賞したエリノア・オストロムさんもきわめて高度なコモンズとして注目していました。

山極●ゴリラもなわばりをもたずに、複数の群れが遊動域を大幅に重複させて暮らしています。

狩猟採集民も同じように行動域を重複させるコモンズをもっています。ただ、人間だけが「家族」と「共同体」という二重構造をもつ社会をつくります。それは、高い共感力によって家族と共同体という異なる二つの論理を両立させることができたからです。

家族は見返りを求めない組織です。基本的には、親は子どもに、子どもは親に対して、みずからの行ないに見返りを求めない。一方、共同体は、それぞれの土地のルールに従って分担を決めて、互酬性に基づいて協働する。だから、見返りを求めない家族の論理とは対立してしまう可能性がある。

けれども人間は、「あいつはいま、子どもが病気でたいへんだ。自分も同じような事態になるかもしれないから代わってあげよう」と、共感能力と先を見通す力があつてこそ、論理が異なる二つの組織を同時に運営できるのです。ゴリラやチンパンジーにはそれはできない。ゴリラは家族的な集団しか営まないし、チンパンジーは共同体だけですからね。

阿部●どちらか一方だけなのですね。

山極●人間は進化の過程で、論理の異なる二つの組織を両立させはじめた。まず、森林から出て危険な草原で暮らしはじめると、肉食獣によって子どもをたくさん失った。だから多産になり、しかも脳が大きくなって成長に時間がかかるようになると、手のかかる子どもをたくさん抱えることになった。その結果、母親と父親だけでは子育てでできなくなり、周りの人の手



2005年、カフジにて



山極壽一

を借りて共同で保育をはじめた。森林の外で生き延びるには家族を超えた協力が不可欠となって、共同体ができた。そこには、人間のもつ生物学的な特性と文化の力が結び合わされて社会力を生み出しているのです。

欧米の学者とちがい、日本の霊長類学者は、社会の奥底には人間や類人猿、サルとのそなえる生物学的な性質の連続性があるはずだと考えた。だからこそ、「人間は文化的な存在だから他の生物とは切り離すべきだ」とは考えないのですよ。

生物の進化の過程は「文化的な行動」

阿部●日本の霊長類学者は、人間と生物の進化を切り離すことに異議を唱えたのですね。初代所長の日高敏隆さんが、ある研究会で「動物だって人間じゃないか」といって発言されたのを思い出しました。「人間だって……」でないのが日高さんらしい。

山極●欧米の文化人類学者たちは、19世紀にはダーウィンの進化論を受けて人間の家族形態を比較して社会進化論を唱えています。欧米社会の核家族が人間の進化の最終形態であり、それ以外の地域のプリミティブな社会の家族形態は人間の進化を遅れた社会とみなしたのです。

それに異を唱えたのがフランツ・ボアズたちの文化相対主義です。人間の文化にある諸形態はそれぞれが密接に結びついているので、文化全体を理解しなければならない。文化の一要素を単純に比較するなという主張です。しかも、ハーバート・スペンサーの優生思想が人に優劣をつける人種差別につながった経緯があります。動物に適用する進化という考え方は、人間に適用してはいけないとしたのですね。

阿部●だから、文化人類学では文化相対主義、つまり文化に優劣はないと考えた。

山極●その時点で、人間を対象にした学問と人間以外の生物を対象にした学問とがはっきりと分かれた。進化の議論は人間以外の動物や生物

にかぎり、人間の研究とは分けるべきだと結論づけたのです。

20世紀にはその論調がさらに高まり、本能の研究が盛んになった。動物は、環境の刺激に対する機械的な反応を生得的な性質としてそなえていると考えた。そのしくみを知ることが動物学の役目となったのですね。

よく知られるのはジョン・ワトソンの行動

主義です。動物の行動はメカニクにできているので、刺激と反応系とが理解できればその動物の行動は予測できるとされた。パブロフの実験のように、ある刺激を与えつづければ、動物はその刺激と報酬との関係を理解して、その刺激反応系は動物の新たな行動として現れるとした。

しかし、こういった刺激反応系の研究を人間に当てはめることは御法度だった。19世紀には、パリやロンドンの言語学会が言語の起源や進化を考えることを禁じる決議をしています。これに反駁したのが、日本の霊長類学です。

今西さんは、ある行動様式が遺伝によらずに個体から個体へと伝播することを、「文化的な行動」と定義しました。その意味を拡げて、英語のカルチャーでもなく、日本語の文化でもない「カルチュア」ということばをつくった。その発想の源には、棲



マウンテンゴリラの家族

(次ページにつづく)

日本からの地球環境学 「人間を知る」学問に

やまざわ・じゅいち
地球研所長、京都大学理学部卒業、
同大学院理学研究科博士課程単
位取得退学、理学博士、ルワンダ
共和国カリソケ研究センター客
員研究員、日本モンキーセンタ
ー研究員、京都大学霊長類研究所
手、京都大学大学院理学研究科助
教授、同教授、同研究科長、理学部
長を経て、二〇二〇年九月まで京
都大学総長、二〇二二年四月から
現職。専門は人類学、霊長類学。
あべ・けんいち
専門は環境人間学、相関地域学。
地球研研究基盤国際センターコ
ミュニケーション部門部門長・教
授。二〇〇八年から地球研に在籍。



所長交代式につづいて開催した山極所長と安成前所長の対談（2021年3月20日）

み分けの現象があります。生物は生活の場所を離れては存在しえない。だから、生活の場所が変われば生物の生き方が変わるのです。それこそがカルチャーです。

生物の環境に対する働きかけが変わることも、カルチャーです。ニホンザルの社会構造が地域によって多少ちがうとすれば、それもある種のカルチャーです。伊谷さんは、それを「規矩」ということばで表しています。

阿部●英語の「ノーム」に近いことばですか。山極●近いけれど、ノームそのものではない。たとえば順位制も規矩です。伊谷さんが人間平等起源論として打ち出したサル在先験的不平等から類人猿や人間の条件的平等への進化の過程も一つのカルチャーと呼んでいいでしょう。

総合地球環境学を 日本発の学問に

阿部●今西さんたちは、欧米をかなり意識しつつ、霊長類学を日本発の新しい学問として世界に発信した。地球研の「総合地球環境学」も、日本発の学問として世界に発信したい。

山極●私が今西さんから学んだのは、まずは日本語で考えること。日本の霊長類学は『日本動物記』（光文社）の出版からは

じまった。思想や概念を日本語でしっかりと築いたうえで、世界で初めての霊長類学の英文学術雑誌『Primates』(日本モンキーセンター編)を刊行し、60年以上も続けて発行してきました。地球研も総合地球環境学を創始して20年、最近では*Global Sustainability*という英文学術誌の編集に携わっています。順調な成果の発信を続けていると思います。

ただし、日本の霊長類学は結構苦難の道を歩みました。日本霊長類学会ができたのは1985年。霊長類研究がはじまったのは1948年から40年近くも学会設立が遅れたのは、今西さんが「霊長類学は人類学だ」ということにこだわったからです。当時のサルの研究は、人類学とはみなされなかったのです。

おもしろいエピソードが残っているのですよ。伊谷さんがサルの声のコミュニケーション分析の研究を日本人類学会で発表したら、「それはおもしろいね。サルのことばを発声してくれませんか」という発言があり、サルの声を真似させられたそうです。それだけ人類学者からは異端視されていた。欧米の学者が、「サル一頭一頭に名前をつけるのは悪しき擬人化だ」と非難したのとおなじく、「人類学に動物の研究なんて必要ない」という考え方が世界中に

蔓延していた時代に、「サルを知ることばは人間を知ることだ」と主張したのです。霊長類学を新たな学会としてつくれば人類学会に見放されますから、伊谷さんや河合さんは、「これは人類学なのだ」と人類学会で発表しつつけたのです。

世界に先駆けて1948年に学問として立ち上げたけれど、京都大学に霊長類学を柱とする自然人類学講座ができたのは1963年、霊長類研究所ができたのは1967年です。それから20年近くたった1985年に霊長類学会ができています。大学の附置研究所をつくるには、学会やコミュニティのサポートがなければできない。霊長類学は、学会より先に研究所ができたというめずらしい学問なのですね。

阿部●地球研の総合地球環境学にも学会はなく、専門分野の総体として成り立っている。さらにいえば、第二代所長・立本成文さんは「人間学」と言っていたと思いますが、欧米とは異なる日本の「人類学」の伝統も引き継ぐことができます。

山極●これまで地球研でプロジェクトを実施した人たちは、この学問を立ち上げるために多大な努力をしてきました。それが実を結び、世界にその存在を知られ始めている。今が学問の発展にとって一番おもしろいときだと思いますよ。

〈2021年5月20日、地球研はなれにて〉



マウンテンゴリラとともに
(2008年11月、ルワンダ火山国立公園)